

銀行券發生史論

—日本銀行券の系譜—

岡 橋 保 著



有 斐 閣

著者紹介

一九二九年 九州帝国大学法文学部卒業
和歌山高専商業学校・九州帝国大学教授
一九六八年 九州大学名誉教授・国学院大学教授を経て
現在、大阪学院大学教授
経済学博士

主 著

一九三六年 『貨幣本質の諸問題』(有斐閣)
一九三八年 『貨幣価値論序説』(有斐閣)
一九四九年 『貨幣論』(春秋社)
一九五六年 『金の価格理論』(日本評論社)
一九六七年 『現代インフレーション論批判』(日本評論社)
一九六八年 『貨幣流通法則の研究』(日本評論社)
一九六九年 『信用貨幣の研究』(春秋社)
一九七三年 『金投機の経済学』(増訂版)(新潮社)
所 西宮市南郷町九ノ一八

昭和四十四年十二月二十五日 初版第一刷発行
昭和五十五年三月二十日 初版第四刷発行

銀行券発生史論
——日本銀行券の系譜——

定価三八〇〇円

著 者

岡 橋 保 夫
おか ばし たもつ

発 行 者

江 草 忠 允
え さ た た あ

発 行 所 株 式 会 社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町二丁目十七番地
電 話 東京(二六四)一三一(大代表)
郵便番号(101) 振替口座東京六一三七〇番
本郷支店(113) 文京区東大正門前
京都支店(608) 左京区田中門前町四四

印刷 株式会社 三陽社
製本 株式会社 高陽堂

©1969, 岡橋 保. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

3033-061612-8611

序 論

日本銀行券の系譜をたどるうえに、重視しなければならない点が二つある。第一は利子うみ資本の規定であり、その二は金銀比価、ことに銀の価値低下の問題である。

第一の利子うみ資本の問題は、信用貨幣としての銀行券にとって基本的な規定であつて、とくに、日本銀行券だけにかぎったことではない。けれども、銀行券の系譜の実証的分析において、これまで、とかく、銀行券が銀行の手形である点だけが強調されて、それが「貸し付けられた手形」であることが忘れられがちであつた。こうして、たんなる利子つき証券や、あるいは預金者が銀行にたいして振り出す振手形（小切手の先行形態）に銀行券の先行形態を求めて、信用貨幣としての銀行券と商業貨幣との歴史的な、本質的なちがいが無視されがちであつた。そうして、この誤りは金買上発行銀行券や、あるいは預金者の振り出す小切手をもつて信用貨幣とする見解のなかに、こんにちもなお承けつがれて、根づよく残存している。また、租税徴収人でもあつたクロウジアが租税公金でもつて手形を割り引いたことのなかに、すでに、近代銀行業の先駆形態をみだし、イングランド銀行をもつて生れながらの中央発券銀行とする誤りや、たんなる預り手形にすぎない利つきのゴールドスミス・ノートを銀行券の端緒形態として、ゴールドスミスが無利子のノートを貸し付けるようになって、ここに、はじめて、近代銀行家への転身、脱皮のなしとげられたことを認めようとしないう見解などは、いずれも、銀行券がただの銀行手形や利子つき債券ではなく、貸し付けられた銀行の手形であつて、それが利子うみ資本に擬制されたところの銀行の債務、銀行信用の

通貨形態であることをみあやまつたものにすぎない。また、銀行券の源流を、とおく江戸時代の両替商の預金者がその預金にたいして振り出したところの振手形に求める見解も、また、おなじ過ちを犯したものである。

これに對して、両替商の発行する預り手形に銀行券の源流をもとめる見解は、両替商の預り手形↓為替会社正金無利足預り手形↓国立銀行振出手形・銀行紙幣↓日本銀行振出手形・（貸付発行）銀行券の系譜を説く。前者のように、両替商の振手形↓為替会社金銀預り手形↓国立銀行振出手形・銀行紙幣↓日本銀行（金買上発行）銀行券の系譜を主張する見解とのちがいは、ただ、その始源を江戸時代の両替商の預り手形に求めるか、あるいはその預金者の振手形にみるかの点にあるだけではない。それは、さらに、為替会社の金銀預り手形に利足のついたものと無利足のものとを区別するか、国立銀行の振出手形を振手形、すなわち小切手類似のものとみるか、預り手形とみるかのちがいをもたらし、日本銀行券についても、その典型を金準備以上の貸付発行銀行券にみるか、それとも金買上発行銀行券にみるかの対立にみちびく。

信用貨幣としての銀行券の本質規定における擬制的利子うみ資本規定の喪失は、預金貨幣の実体の確定にあたって致命的な欠陥を曝露する。すなわち、貸付振替によって形成された預金（債務）も、あるいはこの預金の支払指図証である小切手（一種の為替手形）も、ともに銀行の債務をあらわすかぎり、前者の預金債務だけをとって預金貨幣の実体とすることも、あるいは逆に、後者の手形債務を預金貨幣の実体とすることも、無理であつて、預金貨幣の存在形態を手形（小切手）と預金との二重にみとめなければならないあやまりにおちいる。信用貨幣としての銀行券については、まだ、このような銀行債務の二重計算はおこらずにすんだので、貸付発行銀行券とともに、金買上発行銀行券をも、信用貨幣としての銀行券とし、商業貨幣と信用貨幣との本質的区別のあやまりをさらけださずにすんだのである。

第二の金銀比価、ことに銀価値の低下の問題は、第一の擬制的利子うみ資本規定の問題の一般性、その基本性とはちがつて、より特殊日本的な問題である。

日本資本主義の生成、確立のうえに、銀価値低下の果たした役割は無視されえない。徳川旧幣制下における金銀比価と世界市場比価との格差や、銀価値の低下をテコとする外国貿易の発展は、日本資本主義を急速に成熟させた。明治十年（一八七七）前後から明治十四年にかけての物価の騰貴は、銀の価値低下に加速された資本主義経済に内生的な自律的価格運動を反映したものであって、松方正義の紙幣整理は、明治維新政府の原始蓄積過程におけるインフレーションに終止符を打ったものではなかった。これまで、この時期の物価騰貴はインフレーションとみあやまられてきたが、このような見解は、銀価値低下が日本資本主義の発育を促進させた意義をみうしめない、紙幣整理の物価下落加速の效果に眩惑されて、日本銀行の設立に導入された国家資本捻出のための緊縮政策にすぎなかったという、紙幣整理の歴史的な意義を看過することとなる。こうして、明治二十三年（一八九〇）のわが国最初の資本主義的恐慌へとつうずる自律的な価格運動がなかく顧みられないままになっていたのである。

この点の貨幣金融史的な解明は、明治四年の新貨条例によって価値の尺度とされた金が、やがて、市場金銀比価の法定比価からの乖離とともに、明治七年ごろから銀にとってかわられ、そののちの銀価値の急落から、自律的な価格運動の形成、浸透が促進されたことを示している。日本資本主義のこのような成熟過程を背景にして、わが国の銀行券は明治二年設立の為替会社の正金無利足預り手形として発芽し、国立銀行の振出手形や銀行紙幣をへて、中央発券銀行としての日本銀行兌換券へと結実し、価値の尺度が銀からふたたび金にひきもどされた明治三十年（一八九七）のころには、銀行券も、すでに、その非ほんらい化の傾向をはっきりと示すところまで発展していたのである。

第一の信用貨幣としての銀行券の基本的、一般的規定が、日本資本主義という特殊の条件のもとで、日本銀行券のなかにどのように反映、展開されていったかを、史実にしたがって実証分析しようとしたのが、この書物の狙いである。したがって、本書の展開の方法もその目標から、当然、制約されてくる。

第一編では、明治幣制がまだ確立しないうちに発足した為替会社、正金無利足預り手形を發行、貸し付けるようになって、その近代銀行への転身があらわれたことをあきらかにし、信用貨幣の一般的規定がこの正金無利足預り手形においてどのように具現化され、それがさらに国立銀行の振出手形や銀行紙幣にうつがれていったかの過程が分析される。

第二編は、まず、日本資本主義の發育のテコとなった貨幣的側面を、新貨条例が価値の尺度として採用した金の銀への転換の過程にもとめ、銀の価値低下によつて徐々に形成された、資本主義經濟に内生的、自律的な価格運動をあきらかにする。この景氣變動的物価運動を背景にして、はじめて、松方正義の財政金融政策の歴史的課題が、紙幣整理に名をかりた国家資本捻出の政策であつたことがあきらかとなる。この国家資本の導入によつて設立された日本銀行は、まだ、銀行券を發行しない中央商業銀行にすぎなかつた。このようなただの商業銀行にしかすぎない中央銀行として発足した日本銀行に許されていた近代銀行業務といへば、わずかにその振出手形の貸付だけであつた。やがて、銀行券の發行が許され、日本銀行は中央商業銀行から中央發券銀行へとその形をととのえてはきたが、まだ、近代銀行業としての信用創造を行なうにはいたらなかつた。その發行銀行券はいずれも全額銀準備の銀貨に代替流通するものにすぎず、まだ、ほんらいの銀行券というにはほど遠いものであつた。

第三編は、銀価値の低下を契機に發展した外国貿易をつうじて、急速に、資本主義化していった日本經濟が、前期的中央發券銀行にすぎない日本銀行を、どのように近代化していったかの過程について、發券制度の整備、保証

発行制度の拡充と展開のなかに、これを分析するとともに、発券制度の生成、発展にともなって、日本銀行券が信用貨幣として成熟し、やがて非ほんらい化していったその過程を究明する。

こうして、日本資本主義の成長の重要因子となった銀の価値低下が、いま、そのスプリング・ボードとしての歴史的使命を果たして、ようやくその発展をはばむものとなろうとした時、価値の尺度の銀から金への再転換が断行された。明治三十年の貨幣法の制定は、新貨条例における金本位制度を再建したものであって、日本銀行券も、ここに、兌換銀券から金貨に兌換される日本銀行兌換券となった。これで日本銀行発展史はその第一期を終り、明治三十年の幣制改革とともにその発展史の第二期がはじまる。

わが国の銀行券の系譜的分析が、信用貨幣としての一般的規定と特殊日本的規定を、はたして、どこまで明確に、解明することができたかは、読者の判定にまたねばならない。ことに、松方の紙幣整理の歴史的意義についてのわたしの評価は、これまでの通説とまったく異なる。しかし、松方の視角のなかには、銀の価値低下の日本資本主義の成熟にはたした意義の重要性は、いっこうに浮びあがってこないし、むしろ、日本銀行の成立の条件としてインフレーションの克服が強調され、かえって、日本資本主義に内生的な自律的価格運動がみうしなわれてしまっている。ここで、松方の前任者であり、対立的政策の責任者とされている大隈重信関係の文献の開発が必要となってくる。この点は他日の研究にまかたいと考えている。ただ松方文書からしても、史実の貨幣金融論的解釈はじゅうぶん可能であろう。これについては歴史家諸賢の批判をまっして、より完全なものにしたいと願っている。

本書はそれぞれ独立に発表した論文から構成されているが、収録にあたって題名、文章に手をくわえて体系化につとめた。ここに発表をゆるされた各雑誌当局のご好意を謝す。また、文部省科学研究交付金による成果もおお

序 論

ふくまれている。ここに記して謝意を表す。最後に、本書の出版について有斐閣の池淵昌氏のご高配にあずかった。また、面倒な校正に、おなじく有斐閣の樋浦理介君の手を煩わした。両氏に心からお礼を申しあげる。

一九六九年一〇月

国学院大学研究室にて

著者しるす

凡 例

引用文献の略示

- G 『元老院會議筆記』または『筆記』（『元老院會議筆記中金融資料』『資料』第一三卷）
H 『幣制改革始末』または『幣制始末』（『明治三十年幣制改革始末概要』『資料』第一七卷）
K 『貨幣法報告』（『貨幣法制定及実施報告』『資料』第一七卷）
『貨政考要』（上・中・下編）（『集成』第一三卷）
『貨政考要』（法令編）（『集成』第一四卷）
M 『松方伯財政論策集』または『論策集』（『集成』第一卷）
N 『日本銀行營業報告』（上）（『資料』第一〇卷）
『日本銀行半季報告』（上）（『資料』第八卷）
S 『紙幣整理概要』または『概要』（『資料』第一六卷）
『紙幣整理始末』または『始末』（『資料』第一六卷）
『資本論』は全集版による。（K. I. S. 150.）と略示
『資料』（日本銀行調査局編『日本金融史資料』（明治・大正編））
『集成』（大蔵省編『明治前期財政經濟史料集成』）
T 『帝國議會議事速記録』または『速記録』（『帝國議會議事速記録中金融資料』（上卷）『資料』第一四卷）

目次

序論

第一編 日本銀行券前史

第一章 為替会社正金無利足預り手形

一 銀行券の系譜……………三

二 商業貨幣と信用貨幣……………七

三 為替会社切手……………一四

四 銀券と錢券……………一九

五 金 券……………三一

六 正金無利足預り手形……………三六

七 むすび……………四九

第二章 国立銀行紙幣……………五三

一 銀行券の本質……………五三

二 金貨兌換銀行紙幣……………五五

三 紙幣兌換銀行紙幣……………六三

四	日本銀行兌換銀券……………	八〇
五	日本銀行券の系譜……………	八六

第二編 日本銀行券の生成

第三章 新貨条例から貨幣法まで……………

一	銀価値低下と日本資本主義……………	九三
二	明治幣制前史……………	九四
三	明治幣制の成立……………	一〇三
四	新貨条例下の価格標準……………	一〇八
五	金銀貨の打歩……………	一一三

第四章 松方財政金融政策の歴史的課題……………

一	紙幣の回収と国家資本の蓄積……………	一二七
二	物価論における大隈と松方の対立……………	一三三
三	大隈の紙幣整理……………	一三九
四	松方の紙幣整理……………	一四九
五	中央商業銀行の設立……………	一五六

第五章 中央商業銀行から中央発券銀行へ……………

一	中央銀行構想の生成……………	一五九
---	----------------	-----

——「日本帝國中央銀行」——

第三編 日本銀行券の確立

二 中央銀行構想の展開	一六四
三 国家資本の導入と発券の延期	一七四
四 中央商業銀行としての日本銀行	一八二
五 国立銀行条例の再改正と兌換銀行券条例の制定	一九〇

——中央発券銀行の黎明——

第六章 銀券発行制度の整備と拡充

一 兌換銀行券条例の改正	二〇七
二 元老院における保証発行銀券論議	二一四
三 保証発行と政府貸上金	二二五
四 金融逼迫と保証発行制限額の拡張	二三六
五 元老院の差引勘定論議	二四六
六 政府と日本銀行	二五八

第七章 銀券保証発行制度の展開

一 銀券の発展	二六九
二 正貨準備発行銀券	二七六
三 手形保証発行銀券	二八九

——ほんらいの銀行券——

第八章

四	銀券の非ほんらい化.....	三〇一
五	公債保証発行銀券.....	三〇四
六	日本銀行の信用創造.....	三二四
七	軍事公債の発行.....	三二九
八	日清戦争と物価の騰貴.....	三三七
	日本銀行兌換銀券から兌換券へ.....	三四七

——明治三十年の幣制改革——

一	新貨条例下の価値の尺度の転換.....	三四七
---	---------------------	-----

——金から銀へ——

二	銀価値低下と外国貿易.....	三五四
三	貨幣制度調査会の答申.....	三六一
四	貨幣法の制定と物価の騰落.....	三六七

——銀から金へ——

五	幣制改革と日本銀行.....	三七一
---	----------------	-----

——銀券から銀行券へ——

統計表目次

第1表	為替会社発行紙券種類・発行高	三三
第2表	大阪為替会社勘定の推移	四〇
第3表	東京為替会社勘定の推移	四三
第4表	国立銀行資本金・預金・貸出・紙幣流通高〔明治六—九年〕	六二
第5表	国立銀行の開業数・資本金・紙幣発行高〔明治九—十二年〕	六七
第6表	国立銀行資本金・紙幣下付高・流通高〔明治九—十五年〕	六八
第7表	国立銀行の資本金・預金・貸出・紙幣下付高・流通高〔明治九—十五年〕	七〇
第8表	各種預金高と回転率〔明治十二年下期—十五年下期〕	七三
第9表	手形交換高〔明治十三—三十一年〕	八一
第10表	金銀の法定比価と市場比価	九七
第11表	金銀貨の量目と比価	一〇〇
第12表	金銀比価〔明治元—二十三年〕	一〇
第13表	金銀打歩・通貨流通高・物価〔明治元—二十三年〕	一四
第14表	各種政府紙幣増減高〔明治五—九年〕	一五
第15表	金属貨幣流通高〔明治四—二十三年〕	一五
第16表	紙券発行内訳〔明治十一—十五年〕	一六
第17表	輸出入高〔明治元—二十三年〕	一七
第18表	洋銀相場〔明治十一—十八年〕	二三
第19表	紙幣流通高・銀打歩・物価の推移〔明治九—十八年〕	一五二
第20表	日本銀行勘定の推移〔明治十五年下期—十八年上期〕	一八三

第21表	振出手形・割引手形の推移〔明治十五年下期―十八年上期〕	一八七
第22表	金利の推移〔明治十―十八年〕	一八六
第23表	入超・金銀流出・物価〔明治五―八年と同一十四年〕	一九九
第24表	銀行券流通高と正貨準備高〔明治十八年五―十二月〕	二〇三
第25表	日銀公・民別預金と貸出〔明治十五年下期―十八年上期〕	二七一
第26表	手許現金・銀行券・預金貨幣・預金・信用創造率〔明治十五年下期―二十三年下期〕	二七二
第27表	兌換銀券流通高・準備正貨高・準備率〔明治十八年五月―二十三年十二月〕	二七七
第28表	兌換銀券発行高と発行準備内訳〔明治十八年上期―二十三年上期〕	二七八
第29表	兌換銀券発行準備別比率〔明治十八年上期―二十三年上期〕	二七九
第30表	兌換銀券発行高と発行準備内訳〔明治二十三年下期―三十年下期〕	二八三
第31表	兌換銀券発行準備別比率〔明治二十三年下期―三十年下期〕	二八四
第32表	割引手形の推移〔明治十五―三十年〕	二九二
第33表	割引手形内訳〔明治二十一―三十年〕	二九九
第34表	内国手形割引高と拒否高〔明治二十一―三十年〕	二九九
第35表	内国手形割引高と担保品付手形割引高〔明治二十三―三十年〕	三〇〇
第36表	割引手形残高内訳〔明治二十三―三十年〕	三〇〇
第37表	総収入益金と利足内訳〔明治十五―三十年〕	三〇六
第38表	日本銀行信用創造高〔明治十八―三十年〕	三〇四
第39表	信用貨幣内訳と預金貨幣回転率〔明治十八―三十年〕	三一五
第40表	營業取引總高の推移と主要經濟指標〔明治二十一―三十年〕	三二六
第41表	東京國債直取引平均相場〔明治二十六年・二十七年・二十九年〕	三二三
第42表	軍資金收入内訳	三二九
第43表	軍資金一時補填内訳〔明治二十七年十月―二十九年五月〕	三三〇
第44表	軍費支弁通貨内訳〔明治二十七年六月―二十九年三月〕	三三一

第45表	日本銀行券発行還収要因〔明治二十六—三十年〕	三三
第46表	通貨・金銀比価・物価・為替相場〔明治二十六・二十八・三十年〕	三四
第47表	通貨内訳〔明治二十六—三十年〕	三六
第48表	為替相場と平価〔明治二十六—三十年〕	三七
第49表	商品輸出入高〔明治二十六—三十年〕	三九
第50表	国別輸出入高〔明治二十六—三十年〕	四〇
第51表	金銀貨・金銀地金輸出入高〔明治二十六—三十年〕	四〇
第52表	金銀貨の量目と金銀比価	四九
第53表	金銀比価・輸出入高〔明治六—三十年〕	五五
第54表	本邦対金貨国輸出入指数〔明治二十二年・二十八年・二十九年〕	五五
第55表	本邦対銀貨国輸出入指数〔明治二十二年・二十八年・二十九年〕	五七
第56表	本邦対金銀貨国輸出入高と増加率〔明治二十一年・二十九年〕	五八
第57表	金銀打歩・金銀比価・物価〔明治二十一—三十年〕	六〇
第58表	物価と金銀比価〔明治二十一—二十九年〕	六八
収録論文一覧		卷末